

逝去された名誉会員等への追悼文

角田文男先生を悼んで



1930年 9月4日 生まれ
 1957年 福島県立医科大学医学部
 卒業
 1962年 北海道大学大学院修了
 福島県立医科大学助教授
 1972年 岩手医科大学医学部教授
 1999年 退職
 岩手医科大学名誉教授
 2010年 瑞宝中綬章受章

日本公衆衛生学会名誉会員 角田文男先生が享年88歳でご逝去されました。先生は1957年に福島県立医科大学をご卒業後、北海道大学大学院で公衆衛生学初代教授の阿倍三史先生の御薫陶をお受けになりました。大学院修了後の1962年には、母校の福島県立医科大学公衆衛生学講座 辻義人教授の下、助教授に就任されました。その後、約10年間の研鑽を経て、1972年に岩手医科大学衛生学公衆衛生学講座に第三代教授として赴任しました。教授に就任してから実に27年間の長きにわたり教授として多方面にわたりご活躍頂きました。

岩手医科大学内では1984年から1989年まで5年間にわたり学生部長を務めました。学会活動と致しましては、1985年に国際フッ素研究学会会長、1991年に第50回日本公衆衛生学会会長、1996年に第45回農村医学会会長、1998年に第71回日本産業衛生学会会長をお務めになりました。学会活動ではこの他にもハンガリーフッ素研究学会初代名誉会員、中国農村衛生協会名誉理事、日本産業衛生学会理事、大気環境学会理事・副会長、日本衛生学会幹事・評議員および日本学術会議会員を3期お務めになりました。

社会活動と致しましては、中央公害対策審議会専門委員、労働衛生指導医、日中医学協会専門委員、岩手県都市計画地方審議会会長、岩手県開発審査会会長、岩手県環境審議会会長、岩手県医療審議会委

員等、数多くの要職にお付き頂き、県内外の公衆衛生の向上に多大な貢献をして下さいました。

後輩の育成にも顕著な実績を挙げて下さいました。先生の教え子からは、立身政信岩手大学教授、板井一好盛岡大学教授、小野田敏行岩手大学教授と3名の教授を輩出し、厚生労働省では東北厚生局盛岡事務所の中屋重直指導医療官、岩手県では野原勝保健福祉部副部長、柳原博樹中部保健所長等、行政分野にも有能な人材を送り出して頂きました。

先生のご研究領域は、環境医学分野、産業医学分野、農村医学分野、学校保健分野と公衆衛生に関連する幅広い分野に及んでいます。特にフッ素に関する研究では中国、インドとの共同研究を初め世界的な貢献をしております。産業医学分野では、地元の唯一の専門講座として、岩手県医師会と共同で産業医の育成に貢献するとともに、日本産業衛生学会東北地方会事務局を10年以上にわたり担当し、産業保健分野の研究発展に貢献しました。また、農村医学においてもその設立の当初から中枢メンバーとしてご活躍頂きました。岩手大学の立身政信教授は父親が平鹿総合病院長の立身政一先生で沢内村の深沢晟雄村長の食道がんの手術をしたことでも有名ですが、立身先生親子は2代にわたり農村医学会会長を務めたことでも有名です。角田先生は佐久総合病院の若月俊一先生とともに、「農夫症」に取り組み、農業労働者の健康管理、健康の維持・向上に多大な貢献を致しました。学校保健分野では、肥満児の問題にわが国で初めて介入研究として取り組み、大きな成果を挙げました。

先生が追求された全世代にわたる公衆衛生の研究と実践は今も後輩に受け継がれています。超高齢社会を迎えた現在こそ、公衆衛生の学問的基盤の強化とさらに効果の高い公衆衛生の実践が求められていると思います。

ご冥福をお祈りいたします。

岩手医科大学衛生学公衆衛生学講座
 坂田清美

近藤健文先生を追悼して



1939年 5月8日 生まれ
 1964年 慶應義塾大学医学部卒業
 1967年 厚生省入省
 1979年 青森県環境保健部長
 1982年 環境庁特殊疾病対策室長
 1990年 厚生省北海道地方医務局長
 1991年 慶應義塾大学医学部教授
 2002年 公害健康被害補償不服審査会委員

近藤健文先生が本年4月にお亡くなりになりました。御冥福をお祈り致します。近藤先生は、昭和39年に慶應義塾大学医学部をご卒業され、インターンの後、静岡県に奉職されました。その後、厚生省に入省され、国ならびに地方行政の公衆衛生分野における要職を歴任され、多くの業績を残されました。

厚生省御退官後は母校の慶應義塾大学医学部公衆衛生学教授にご就任され、公衆衛生学の教育・研究にご尽力されました。慶應義塾大学をご退任の後、公害健康被害補償不服審査委員会委員の要職を務められました。

近藤健文先生の日本公衆衛生学会でのご活躍には昭和40年に学会員になられて以来、大変長いものがあります。昭和53年に評議員に就任され、平成8年から23年まで5期にわたり理事を務められました。この間、多くの委員会の委員長も務められ、日本公衆衛生学会に多大な貢献をされ、学会活動を支えて下さりました。

「学会を支えて下さった」という言葉はまさにその通りでした。私（大井田）は平成17年から学会庶務担当理事、23年からは学会理事長をやらせていただきましたが、この12年は近藤先生のアドバイスがいつもありました。

例えば平成22年に学会長として東京で開催した時にどのような学会総会にするか、テーマは？ シンポジウムは？ と悩むわけです。かつて厚生労働省に勤務した時、事業は前例や法令を参考に計画するわけですが学会総会をどうしようかと以前開催された学会を調べたときに近藤先生は軽やかに「大井田君、学会は自由なんだよ」言われました。目から鱗

とはこのことです。そうです。「学会は自由」なのです。これで肩の荷が下りた気がしまして自由にテーマを決め、シンポジウムも決めて無事に終わりました。あの言葉には感謝してもしきれません。平成23年理事長になった後も、「学会は自由」という言葉の通り、多くの理事（当時）の意見は尊重し、たとえ私が反対したいと思っても理事の主張する委員会の開催を理事会で承諾したと思っています。そして現在、磯理事長のもとでさらに多くの委員会を設置されたと聞いたときに「学会は自由」という言葉は生きていると思いました。磯先生には「有難う」と言いたいです。

叱られもしました。平成21年に近畿で学会を開催する予定のとき、いくつかの県に声を掛けましたが県の財政当局から反対され、途方に暮れ、ズルズルと時間が過ぎて行きました。日本公衆衛生学会は開催県から財政的な援助を受けることになっており、調べた限りそんな学会は日本中どこにもないので、しかし開催県から支援を受けないと学会総会は開催できません。そのときに近藤先生から「大井田君、君は庶務担当理事だからしっかりしないとイケない」とお叱りを受けました。これではと思い、当時の實成理事長がいた岡山にすぐに飛んでいき、新大阪駅前ホテルの喫茶室で奈良県立医大の車谷先生に二人で必死に開催をお願いしました。今でも車谷先生には感謝いたします。車谷先生が了承していただければ平成21年の学会総会は開催できなかったと思っています。近藤先生のお陰です。

奇策もいただきました。福岡で畝先生を学会長に学会総会を開くことになりましたが、すぐに風の便りに県財政当局が反対しそうだと聞こえてきました。開催できなければ困ったことになり、畝先生にも失礼になります。そのとき近藤先生から「畝先生にも県庁にお願いし、厚生労働省から出向している岡本先生から副知事に支援をお願いしては」とのアドバイスをいただきました。お陰様で開催できました。

前述したことだけではありません。「学会を支えて下さった」ことはたくさんあります。天国におられる近藤先生に日本公衆衛生学会を支えて下さいとお願いせずにはいられません。近藤先生、安らかにお休みください。

日本大学医学部特任教授 大井田隆